

萩原恭次郎『死刑宣告』論

——「装甲弾機」を中心に——

大川内 夏 樹

一、はじめに

萩原恭次郎の第一詩集『死刑宣告』は、長隆舎書店より一九二五年一〇月一八日に刊行された。詩集の装幀者である岡田龍夫による詩集跋文「印刷術の立体的断面」に「僚友恭次郎兄の詩集が愈々出版すると聞いたMAVO・NNKの關係有志十四五名は君の爲め一斉に凄い名刀を、嬉んで振り廻した」とあるように、恭次郎と関わりの深かったマヴォイストたちの全面的な協力を得て作られた『死刑宣告』は、カラージュ作品の写真版やリノリウム・カット版画の挿入、あるいはタイポグラフィの実験など詩の領域における視覚表現の可能性を模索した画期的な詩集であった。

ではまず、本稿で扱う「装甲弾機」という詩が、『死刑宣告』のなかでどのような位置にあるのかを確認しておきたい。『死刑宣告』は全体が九つのパートに分けられている。そして、そのそれぞれに「装甲弾機」、「蛙と人間の定価50銭也」等のタイトルが付されている

のだが、本稿で扱う「装甲弾機」という詩は、九つのうちの一番初めのパートである「装甲弾機」の冒頭に据えられており、いわば『死刑宣告』というテキストへの入り口ともいふべき場所に位置していると言える。

萩原恭次郎は、『死刑宣告』の「詩集例言」において「「装甲弾機」篇最も古く、すでに五年前の作である。ただ懐かしさのために載録した。掲載順はほぼ三四年來のものを創作年代の順序によつて配列した」と、収録作や配列に関してそれほどこだわっていないかのような言葉を記している。しかし、阿毛久芳の「確かに「装甲弾機」には発表年月が古い作品が集められている。だが他の章では大正一三、一四年に発表された詩篇が織り込まれており、單純に制作年代順とはいえない^①」との指摘もあり、詩の配列について恭次郎の言葉を鵜呑みにすることはできないだろう。本稿では詩集の入り口にあたる「装甲弾機」の分析を通して、『死刑宣告』の世界にアプローチする手がかりを探ってみることにする^②。

二、「装甲弾機」

「装甲弾機」は、一九二二年三月六日の『東京日日新聞』に掲載後、いくつかの改行や表記の変更を除き、ほとんど異同のない状態で『死刑宣告』に収録されている。⁽³⁾以下に、『死刑宣告』収録時のかたちで、その全文を引用する。

近代的城市の飛躍雑踏中に

我は装甲の巨大なる弾機を見る

気まぐれなる煙りを吐き乍ら

鈍重なる無愛嬌者

彼は軍隊式に声を発し

都会の嗜好す

甘美や色彩や繊細を知らず

強い黄色の煙りを吐きちらし

都会をよごし気をわるくし

驚き易い心臓を圧迫さす

彼は弾丸や群衆の心に従はない

最も真赤き野蛮な心臓をもつ

意のまゝ飽くまで

資本化した雑踏の世界に耐へ

混乱への強い強い出現！

おゝ 過敏なる女性美文明に

幅広い肩をゆるがす無愛嬌者

喜びも悲しみも現せない

醜い顔をして

されど彼が泣く如き

強き頑迷なる心臓の閃き！

彼が熱意！

彼が力量！

彼が破壊！

彼が創造！

彼がまことなる強力の運転！

文明への争闘！

あゝ 見る 我は現在！

巨大なる装甲の弾機！

美しき近代都市の飛躍雑踏中に

まずタイトルともなっている「装甲弾機」という言葉についてだが、この語が具体的に何を指し示しているのか俄かには判断し難い。一九一五年刊行の『大日本国語辞典』によると、「装甲」（さうかふ）とは「よろひを着て身の拵へをすること」、「敵弾を防ぐために、船体に鉄板を張ること。又そのもの。」の意である。また「弾機」の項には、「はじき。ばね。」とある。これらの記述から想像するに、「装甲弾機」とは鋼鉄でできた弾力機械のようなものであろうか。「弾機」については、詩の本文に「銃弾」という語が見られることから「弾」を発射する「機」械と解することもできそうである。「軍隊式に声を発し」という表現からは、兵器のイメージが喚起される。これらのことを総合して考えるならば、「装甲弾機」とは、鋼鉄製の巨大な戦車のようなものを指し示す言葉として捉えることができる。

ではここから「弾機」がテキスト中でどのように表象されているのかを検討してみることにする。まず注意をひくのは、「近代都市」や「都会」といった言葉に象徴される「文明」とは相容れない「弾機」の姿である。「鈍重」で「醜い」「弾機」は、「色彩」豊かで、「繊細」な「文明」に対する「争闘」を宣言する。恭次郎は詩集の「序」において、『死刑宣告』を「野獣性なる人間的なる愛の詩集」と述べているが、まさに「野獣性」を感じさせる「弾機」の様子が鮮明に表現されている。いわば「弾機」とは、きらびやかな「文明」生活を謳歌する「都会」に突如として現れた反「文明」的で異質な

存在であると言えよう。

また「彼は弾丸や群集の心に従はない／最も真赤き野蠻な心臓をもつ／意のまゝま飽くまで」や「頑迷なる心臓の閃き！」という言葉からは、「弾機」の「文明への争闘」への強烈な意志を読み取ることができるが、このように「弾機」を「彼」と呼び、あたかも一個の人格を有するかのような擬人表現は、ロボットや人造人間に對しての場合と同質の不気味な印象を与える効果を持っている。次に、このテキストにおける語り手として登場する「我」について考察してみる。「装甲の巨大なる弾機を見る」というように「弾機」の姿を目の当たりにする「我」は、「弾機」の様子を克明に描写している。そこには、「巨大」な「弾機」に対する驚きとともに、「彼がまことなる強力の運転！」と、「弾機」の発する圧倒的なエネルギーへの感嘆の情があらわれている。さらに語り手は、「されど彼が泣く如き」と、「喜びも悲しみも現せない」はずの「弾機」の「醜い顔」の裏側に激烈な感情の起伏を読み取り、その内面を代弁する役割を果たしている。つまり、「文明」に敵対する「弾機」は、語り手である「我」にとっては必ずしも忌避すべき存在というわけではなく、「近代都市」を反転させる力の象徴として表されているのだ。いわば「装甲弾機」は、「近代都市」から排除された存在から「文明」への挑戦を宣言するテキストであると言えよう。

野本聡は、「未来派宣言」が求めた美的機能は「崇高の美」にある」としながら、「崇高」という美学的範疇とは、まさに戦争の美

学的特質……日常秩序への侵犯、破壊する巨大な力の発現、「私」の能力を超えた巨大さへのおののき、しかしそこにこそ恐怖の感情とともに「私」が解放されるといった経験——に当てはまるものだ。未来派をはじめとする二〇世紀前衛芸術が、当該の社会の既存の枠組みを「敵」と見なし、その敵と抗争し侵犯し、そこに異化作用を引き起こそうという美的機能を担おうとするものであったからこそ、この「崇高の美」において、前衛芸術（中略）は、美学対象としての戦争と相關するのだ」と述べている。このような野本の「未来派宣言」についての分析は、「軍隊式に声を発し」という表現が「戦争」を想起させ、「弾機」が「文明への争闘」を宣言する、つまり「当該の社会の既存の枠組み」と「抗争し侵犯」すると言う点において、「装甲弾機」にも適応が可能だろう。しかし、野本の議論が「未来派宣言」、あるいは「二〇世紀前衛芸術」一般を対象としている以上、細部においては種々のテキストに個別の要素が見られることもまた当然である。以下、「当該の社会の既存の枠組みを「敵」と見なし、その敵と抗争し侵犯し、そこに異化作用を引き起こす」という野本の指摘を出発点とし、「装甲弾機」そして『死刑宣告』における「近代都市」への「抗争」や「侵犯」の内実を明らかにしていくことにする。

三、「軍隊」と「直情の詩」

「装甲弾機」には、創作過程においてそのイメージの主な源泉となったと推測される二つの先行テキストが存在する。一つは、萩原朔太郎の「軍隊」であり、もう一つは平戸廉吉の「直情の詩」である。この二人の詩人と恭次郎との個人的な関係や、先輩詩人としての影響力の強さを考慮するに、「装甲弾機」の内にこれらのテキストの影を見出すことは難しくないだろう。しかし、本稿においては「装甲弾機」と「軍隊」、「直情の詩」との間の直接的な影響関係を探ることを目的とはせず、これら二つの詩との比較を通じて、「装甲弾機」の特徴を明らかにしていきたいと思う。

萩原朔太郎の「軍隊」は、一九二二年三月号の『日本詩人』に初めて掲載され、のちに『青猫』（新潮社、一九二三・一）に収録された。前掲の論文中で阿毛久芳も指摘していることだが、恭次郎は、「軍隊」について『新潮』掲載の評論「日本詩集批判」で「その流動的な活力に充ちた表出法は、明確に強調された近代的感觸を遺憾なく露出したよい作品であった。氏の漸次進みゆくべき道は、ここに存する事に於て異彩を放つであらう」と讃辞を述べており、強い関心を示していたことがうかがわれる。ではここで「軍隊」の一部を引用する。

この重量のある機械は

地面をどつしりと圧へつける

地面は強く踏みつけられ

反動し

濛々とする埃をたてる。

この日中を通つてゐる

巨重の逞ましい機械を見よ

黝鉄の油ぎつた

ものすごい頑固な巨体だ

地面をどつしりと圧へつける

巨きな集団の動力機械だ。

づしり づしり ばたり ばたり

ざつく ざつく ざつく ざつく

この兇逞な機械の行くところ

どこでも風景は褐色し

黄色くなり

日は空に沈鬱して

意志は重たく圧倒される。

づしり づしり ばたり ばたり

お一、二 お一、二（以下略）¹

「軍隊」「装甲弾機」とは、ともに「巨重の逞ましい機械」（「軍

隊」）、「装甲の巨大なる弾機」（「装甲弾機」）という巨大な機械が登場するということ、そして、「頑固な巨体」（「軍隊」）と「頑迷なる

心臓」（「装甲弾機」）、「黄色くなり」（「軍隊」）と「黄色い煙り」

（「装甲弾機」）といった類似した語句の使用という点で共通性がある。また、二つの詩に「軍隊」の存在が影を落としていることも指

摘できる。「軍隊」は、「通行する軍隊の印象」というサブ・タイト

ルからも明らかだが、進軍の様子を巨大な機械の比喻によって捉えたテキストである。北川透が「一義的な肯定でもなく、否定でもな

く、軍隊の恐怖をイメージとリズムにおいて、よく対象化しえてい

る」と指摘しているように、「づしり づしり」というオノマトペ

や「巨重の逞ましい機械」、「黝鉄の油ぎつた／ものすごい頑固な巨

体だ」といった詩句は、進み行く「軍隊」の威圧的で不穏な様子を

印象的なイメージによって捉えている。つまり、「軍隊」は、メカ

ニカルで威圧的な軍隊の様子を巨大な機械のメタファーによって描いたテキストであるといえる。一方「装甲弾機」においても、「軍

隊」の場合のように「弾機」が軍隊のメタファーであることが明確

に示されてはいないものの、「軍隊式に声を発」する兵器としての

「弾機」に軍隊のイメージを読み取ることは容易である。

しかし、ともに軍隊を想起させるこの二つの機械の描かれ方には、

決定的な違いがあることも指摘しておかなければならない。「装甲

弾機」では、「都会をよこし気をわるくし」、「文明への争闘！」と、

「弾機」の反「文明」、反「都会」的なスタンスがはっきりと打ち出されている。そして、「文明」や「都市」と対立する「彼が破壊」は、「彼が創造」へと連なる建設的側面を有するものとして肯定的に捉えられている。つまり「装甲弾機」において「弾機」は、「近代都市」を解体、再創造する原動力として位置づけられているのである。このように「装甲弾機」が「文明」や「近代都市」への姿勢を明確に示している一方、「軍隊」にそうした傾向は見られない。

「軍隊」は、軍隊の非人間的で抑圧的なメカニズムを、「意思」を「重たく圧倒する」「兇逞な機械」の比喻によってあらわしているが、そこに「文明」や「近代都市」への脅かしを読み取ることは難しい。

このように「装甲弾機」は、「軍隊」と同じ様に軍隊のイメージを喚起する巨大な機会を登場させながら、「文明」「都市」に対するスタンスにおいて大きく異なっている。先に引用した北川透の指摘にもあったように、「軍隊」が「軍隊の恐怖をイメージとリズムにおいて一あらわしたのに対し、「装甲弾機」は、「弾機」という軍隊を思わせる力強い機械を創造することで、「近代都市」に對抗する猛々しいエネルギーを象徴的に表現したということが出来る。

しかし、ここで一つ付け加えておかなければならないことは、軍隊を「近代都市」に対する闘争の象徴として描いたことは、恭次郎の軍隊認識における錯誤であったということだ。なぜなら、軍隊とは人びとを抑圧し、「近代都市」の秩序を守る装置であり、それに対抗するものではないからである。

では、続いて平戸廉吉の「直情の詩」との比較にうつりたい。

直情は私の道徳

私の 行為

私の 芸術

此機械の讃美者は

慕に

見慣れぬ 町へ

力動する

グワワラ

ギボンダー……

鋼鉄製装甲自動車

133957

複眼の閃き

暗黒への宣戦

先へ！ 光の信号^{〔2〕}

右の引用は、平戸廉吉「直情の詩」の全文である。ここにも「鋼鉄製装甲自動車」という「装甲弾機」に類似した機械が登場しているが、「装甲弾機」が「文明への争闘」を宣言しているのに対し、「直情の詩」においては、「暗黒への宣戦」が掲げられる。「機械の讃美者」という言葉が見られることから、この「暗黒」とは、機械

文明の「光」と対極に位置するものと理解することができる。こうした熱烈な機械讃美は、平戸が日比谷街頭で撒布したビラ『日本未来派宣言運動』のなかで「未来派詩人は多くの文明機関を謳ふ¹²」と述べていることから分かるように、未来主義の強い影響下にある

美意識の反映である。恭次郎もまた、平戸ら同時代の詩人と同様に未来主義の洗礼を受けた一人であり、「装甲弾機」が鋼鉄の機械をモチーフとしているという点では、「直情の詩」やその背景にある未来詩主義の主張と共通する部分を有している。しかし、恭次郎と平戸の「文明」に対するスタンスは大きく異なっている。「直情の詩」における「鋼鉄製装甲自動車」が、讃美すべき機械文明の象徴的存在であるのに対し、「装甲弾機」は文明によって生み出された機械であるにも関わらず、その文明を脅かす不気味な存在として表象されているのである。また「弾機」は「鈍重なる無愛嬌者」として描かれており、この点も速度を愛する未来主義の発想とはやや趣を異にするところである。神原泰訳の「未来派宣言書」には、「私達は、世界の栄光は一つの新しい美即ち快速の美によつて富まれた事を宣言する。爆発的な息を吐く蛇にさも似た太い管で飾られた車体を持つ走り行く自動車……散弾に乗って走るかのやうな吼える自動車は、サモスレスの勝利よりも更に美しい¹³」と速度の美を熱狂的に支持する未来主義の立場があらわれている。こうした「快速の美」こそが、「装甲弾機」において破壊の対象として描かれる「近代都市の飛躍」にふさわしい美の形であると言えるだろう。しかし

「弾機」は、「快速の美」とは正反対の「鈍重なる無愛嬌者」であり、「都会をよこし気をわるく¹⁴」するという表現からも分かるように、「美しき近代都市」とは相容れない異質性を身にまとった「グロテスク」な存在なのである。

さらに「軍隊」、「直情の詩」という二つのテキストに対し、先にも少し触れたように「装甲弾機」には、擬人法を用いて機械を描いているという特徴が見出されるが、この点については、後に擬人化の内実とともに詳しく検討する。

四、グロテスク

直前で「弾機」を「グロテスク」という言葉によって評したが、カイザーは『グロテスクなもの』において「グロテスクなものは疎外された世界である¹⁵」と述べている。カイザーによれば、「疎外された世界」では、「われわれになじみ深く気がおけないものが突如、奇異で無気味なものとして暴露¹⁶」され、「われわれの世界の信憑性というものが実はみせかけにすぎぬとわかるものだから、恐怖はわれわれにはげしく襲いかかる。と同時に、われわれはこの変貌した世界では生きることができないと感づく。グロテスクなものは死の恐怖よりもむしろ生の不安をそりたてる¹⁷」ということだ。また、カイザーは「グロテスクなものの特徴を示す題材として、それ自体の危険な活動をくり広げるいっさいの機械¹⁸」を挙げ、「機械的なもの

のは生命を得ることによって疎外され、人間的なものはその生命を失うときに疎外される」と述べている。擬人化された「弾機」とは、まさに「生命を得」た「機械的なもの」であり、「弾機」の出現は「近代都市」の「驚き易い心臓を圧迫」させる。そして「弾機」の吐く「黄色の煙」は、見る見る都会を変色させ、「文明」の世界の「甘美や色彩や繊細」の裏に隠れた「グロテスク」な様相を露にするのだ。

さらに「グロテスク」という言葉にこだわるならば、一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけてピークをむかえるエロ・グロ・ナセンスの流行の中で刊行された『現代猟奇尖端図鑑』に、新居格が「グロテスク序説」という短文を寄せている。新居は「グロテスク」を「暗面に於いては不気味と危険と罪悪と背徳とをさへ蔵してゐるとも云へる世界である」と述べている。島村輝は、こうした「グロテスク」について「境界を一步跨ぎ越せば犯罪と認定されてしまうような危険な領域」と述べ、それ故ブームの中の「グロテスク」がそうした領域から「距離をおいた、当たり障りのないもの」ならざるを得なかった¹⁷⁾。事実を指摘している。一方、『死刑宣告』の世界では、「装甲弾機」において予告されているように、「近代都市」は、「不気味と危険と罪悪と背徳」で溢れかえった「グロテスク」な姿を露にしているのである。たとえば、次に引用する「蛙と人間の価五十銭也」では、「蟻地獄」のように人間を吸い込んでゆく「都市」の様子が描かれている。

赤いレッテルには

北海道産の蛙と人間一匹の価

金五十銭也

――せつばつまつた蟻は

――蟻地獄にをいて悶き乍ら食はれ行く

――油のきれた機械は

――空廻りばかりしてゐる

――円錐形の底の方に

――たう／＼這ひ上れない屍が

――天上へ眼を向けてころがつてゐる

赤いレッテルには

北海道産の蛙と人間一匹の価

金五十銭也

「蛙と人間の価五十銭也」は、中央の聯を字下げにすることで、視覚的にも「蟻地獄」を思わせるテキストである。この「蟻地獄」のような「都市」にあつては、「人間」が一人ではなく「一匹」と表現されていることから分かるように、「人間」と「蛙」とのあいだの差異は失われ、等価の商品として陳列されている。また『死刑宣告』には、「始業だ！終業だ！歩け！始業だ！終業だ！歩け！」

の掛け声とともにロボットのようには働かされる労働者を描いた「朝・昼・夜・ロボット」という詩が収録されているが、「蟻地獄」の底に転がる「油のきれた機械」とは、このように使い捨てられた労働者の姿であろうか。そして、そのすぐそばには既に事切れて「たうく」這ひ上れない屍が、「天上へ眼を向けてころがつてゐる」のだ。先に「機械的なものは生命を得ることによって疎外され、人間的なものはその生命を失うときに疎外される」という「グロテスク」についてのカイザーの言葉を引用したが、「蟻地獄」のような「都市」にからめ取られてしまった「人間」は、まさに生命を奪われ機械化した「グロテスク」な姿をさらしているとと言える。

奇怪なチャルメラを吹いて支那人がゆく
乾からびたインキで描かれた食欲
刑事室には蒼白な人像が反映する
探偵のノート・ブックには惨劇がうつゝた

むき出された乳房に注射してゐる地下室
頭蓋骨が腐る患者
女よ！
砕かれたインキ瓶とナイフで俺の頭を引っかき廻せ
惨忍な心臓は風を切つて突進する
キリキリ 廻つてどこへ叩きつかるか知れない

ひきさかれた姦淫の旗は真赤だ！

壁の中につゝ立つてゐる男

キ キ キ

右の引用は「壁の中につゝ立つてゐる男」の全文である。「奇怪なチャルメラ」の音によって始まるこの無気味な詩には、犯罪や悪徳の雰囲気が充満している。「刑事室には蒼白な人像が反映する／探偵のノート・ブックには惨劇がうつゝた」という箇所からは、取り調べを受ける犯罪者の姿が浮かび上がり、「むき出された乳房に注射してゐる地下室」という一節は、サディズムやマゾヒズムを連想させる毒々しいエロティシズムを湛えている。「砕かれたインキ瓶とナイフで俺の頭を引っかき廻せ」とは、混濁した意識の中で発せられた自虐的な狂気の叫びであろうか。「装甲弾機」が現れた「美しき近代都市」とは、こうした「不気味と危険と罪惡と背徳」を背負ったものを「壁の中」つまり牢獄へと押し込めることで成立する世界である。テキストの末尾に据えられた「キ キ キ」という無気味な笑い声は、そうした「近代都市」の「美しき」な世界に対する「壁の中」からの脅かしなのである。

と密接に結びつく行為なのである。こうした「頑迷」なまでに自己の信念に忠実な「弾機」の姿は、「彼の手には彼自身の鍵」を握り、「日比谷」を「一人行く」「彼」のイメージに重なってくる。

ところで、先に「装甲弾機」の特徴の一つとして機械の擬人化を挙げておいたが、この擬人化によって「弾機」に付与されている人格とはどのようなものなのだろうか。テキストの初めから順に「弾機」の性格に関する表現を拾っていくならば、「気まぐれ」、「鈍重なる無愛嬌者」、「弾丸や群集の心に従はない」、「意のまゝ飽くまで」、「喜びも悲しみ現せない」、「彼が泣く如き／強き頑迷なる心臓の閃き」といったものが見出される。これらの語句から考えられる「弾機」の性格とは、一見何を考えているか分からない無愛想で頑固な性格だが、その内面には激烈な情熱や信念が潜んでいるといったものであろうか。正義感溢れる義侠的人物ということもできるかもしれない。こうした人物造形は、例えば萩原朔太郎の「僕等の親分」における「僕等の親分は自由の人で／青空を行く鷹のやうだ。／もとより大胆不敵な奴で／計画し、遂行し、予言し、思考し、創見する。／かれは生活を創造する。／親分！」⁽²⁵⁾というものや、中野重治の「豪傑」に見られる「むかし豪傑というものがいた／彼は書物をよみ／嘘をつかず／みなりを気にせず／わざをみがくために飯を食わなかつた／うしろ指をさされると腹を切つた／恥かしい心が生じると腹を切つた」⁽²⁶⁾といったものと通底する。北川透はこれら二つの詩に「〈田舎〉的な世界」⁽²⁶⁾に生きる「前近代的な戒律に従う日本的

なやくざ」⁽²⁷⁾の姿を見出しているが、「親分」や「豪傑」と類似した人物像を想起させる「弾機」をどう解すればいいのだろうか。伊藤信吉は「農的メビウスの輪」において、恭次郎のテキストに「黒き農民」の呪詛、憎悪、反抗、否定、絶望⁽²⁸⁾を見出し、『死刑宣告』に流れる「農的なもの」⁽²⁹⁾の感情を論じている。伊藤の言う「農的なもの」は、「〈田舎〉的な世界」と言い換えることが可能だろう。

『死刑宣告』には、「〈田舎〉的な世界」と「近代都市」とを分裂ではなく、地続きのものとして捉える視点が提示されている。例えば、「凸凹の皺」では、「都会の狂痴にまかしをる地の母のかなしき微笑！」と、道路によって「都市」と結びつけられたことで「〈田舎〉的な世界」が崩壊していく過程が描かれている。また、「屋根裏の鴨」においては、そのようにして疲弊し、崩壊した「田舎」から出てきた人物が都会の夜にまぎれて「ふるさとのなまりで語つてゐる」姿が描かれている。「都市」は、「〈田舎〉的な世界」を吸収し拡張し続けることで存続し、また「〈田舎〉的な世界」は崩壊すると同時に「都市」へと流れ込む。先にも引用した「朝・昼・夜・ロボット」や「蛙と人間の価五十銭也」は、こうして「田舎」から「都市」へと流れてきた人びとの行く末を暗示していると言える。つまり、「弾機」が「争闘」を宣言する「美しき近代都市」とは、自らの存続を保障するために、絶え間なく「田舎」を自身の内側に取り込み、搾取し続ける存在なのである。

「日比谷」や「無題」など『死刑宣告』に収録されているいくつかの詩篇と同様に、「装甲弾機」にもテロリストの影がみとめられる。そして、テロリストに見立てられる「弾機」は、その擬人化の過程において、義侠的な性格を付与されている。こうした人物像は、萩原朔太郎「僕等の親分」の「親分」像と相通じるものであり、北川透が「親分」において指摘したように、「へ田舎」的な世界」を背負っていると言える。つまり、テロリストを思わせる「弾機」は、自らの出自であり、「近代都市」によって「搾取」され続ける「田舎」の立場からの抵抗を試みるものとして描かれているのだ。

六、おわりに

本稿では、詩集の冒頭に据えられた「装甲弾機」の分析を通じて『死刑宣告』の世界にアプローチする手がかりを探ってきた。「装甲弾機」に登場する「弾機」は、「近代都市」と対立する存在として描かれる。こうした姿勢は、「弾機」が背負っている「不気味と危険と罪悪感と背徳」、そして「へ田舎」的な世界」と「近代都市」との関係を反映したものである。そして、「弾機」の「争闘」とは、「美しき近代都市」によって抑圧されたものたちによる抵抗だったと言える。

また、今回考察したテロリストというモチーフは、『死刑宣告』以降も恭次郎のテキストに継続して見出されるものであり、今後の

課題としてそれらのテロリストの表象の変遷についても考えてみたい。

本稿の作成に当たり萩原恭次郎のテキストの引用には、初出を確認した上で『萩原恭次郎全集』（全三巻、静地社、一九八〇・二一九八二・一〇）を使用した。なお旧漢字は新漢字とし、旧仮名遣いそのままとした。

注

(1) 阿毛久芳『「死刑宣告」小論』『詩論』一九八七・一二、七六頁。なお阿毛久芳は、「一篇の詩よりも全篇を通じて私自身を構成して識つて貰いたい」という『死刑宣告』の「序」の一節を引用しながら、「装甲弾機」に恭次郎の「自画像構成の意味があった」と指摘している。

(2) これ以降、論の展開に混乱が生じることを避けるために、詩のタイトルとしての「装甲弾機」を示す場合は「装甲弾機」、テキスト中に描かれている「装甲弾機」を示す場合は「弾機」とのみ記すことにする。

(3) 異同は、「飛躍雑沓中に」(『東京日日新聞』)・「飛躍雑沓中に」(『死刑宣告』)・「都会をよこし」(『飛躍雑沓中に』)・「都会をよこし」(『死刑宣告』)・「雑沓」・「雑沓」・「喜び悲しみも表せない」・「喜びも悲しみも現せない」・「彼が熱意 彼が力量 彼が破壊」・「彼が熱意／彼が力量／彼が破壊」・「彼が熱意 彼が力量 彼が破壊」・「彼が熱意／彼が力量／彼が破壊」となっている。なお、踊り字、感嘆符の異同については省略した。スラッシュ(／)は改行を示す。

(4) 上田万年、松井簡治『大日本国語辞典』金港堂、一九一五・一〇・一九一九・一二。なお『日本国語大辞典 第二版』(小学館)の「装甲」の項

には、恭次郎の「装甲弾機」が例文として引用されている。

- (5) 野本聡「速度都市における『死刑宣告』」『明治大学大学院紀要』一九九三・二、一九一頁。
- (6) 初出は『新潮』一九三・九。
- (7) 萩原朔太郎「軍隊——通行する軍隊の印象——」『日本詩人』一九二二・三、六九—七二頁。
- (8) 北川透「朔太郎における国家と私——アンビバレンツな構造」『国文学解釈と教材の研究』一九八九・六、九六頁。
- (9) 平戸廉吉「直情の詩」『日本詩人』一九二二・一一、四三—四四。
- (10) 平戸廉吉「日本未来派宣言運動」一九二二・一二。
- (11) マリネッツイ著、神原泰訳「未来派宣言書」『芸術の理解』イデア書院、一九二四・四、六三頁。
- (12) カイザー著、竹内豊治訳『グロテスクなもの』法政大学出版局、一九六八・三、二五八頁、傍点省略。
- (13) カイザー、前掲書、二五八頁。
- (14) カイザー、前掲書、二五八頁。
- (15) カイザー、前掲書、二五六頁。
- (16) カイザー、前掲書、二五六頁。
- (17) 新居格「グロテスク序説」『現代猟奇尖端図鑑』新潮社、一九三一・四、七〇頁。
- (18) 島村輝「エロ・グロ・ナンセンス」『コレクション・モダン都市文化第一五巻 エロ・グロ・ナンセンス』ゆまに書房、二〇〇五・一一、六三四頁。
- (19) 島村輝、前掲論文、六三四頁。

(20) 海野弘「萩原恭次郎『死刑宣告』……都市と文学」『海』一九八二・四、一八四頁。

(21) 海野弘、前掲論文、一八五頁。

(22) 海野弘、前掲論文、一八五頁。

(23) 古俣裕介「萩原恭次郎『赤と黒』の時代」『近代日本文学の諸相』明治書院、一九九〇・三、三三五頁。

(24) 萩原朔太郎「僕等の親分」『萩原朔太郎全集 第一巻』筑摩書房、一九七五・五、二九七—二九八頁。

(25) 中野重治「豪傑」『中野重治全集 第一巻』(定本版) 筑摩書房、一九九六・四、四一頁。

(26) 北川透「一九二六年、詩意識の転換——中野重治『郷土望景詩』に現れた憤怒について——」『文学』一九八五・一、一〇九頁。

(27) 北川透、前掲論文、一一頁。北川は、朔太郎と中野のテキストに共通点をとめながら、「豪傑」に対しては「中野は、あくまで自己の内部の豪傑的なもの、重く苦しい村落共同体的な戒律の、客体としての対象化という性格を持たせている。当人の意志は別として、少なくとも作品としてみるかぎり、そこに美化も否定もない。《豪傑》のイメージは、ほぼ完璧にメタフォアと化した」(一一〇頁)とし、「僕等の親分」については、「この作品には分裂した印象がつきまとっている。(中略)外国のギャング映画を見た印象で、この作品を書いているうちに、そこに浪花節的なやぐざがまぎれこんでしまった」(一一〇頁)と異なる評価を与えている。

(28) 伊藤信吉「農的メビウスの輪」『伊藤信吉著作集 第二巻』沖積舎、二〇〇一・一一、三九三頁。

(29) 伊藤信吉、前掲論文、三八三頁。